

# 近代個意識の発生と終焉

安 津 素 彦

## 序

湯川秀樹博士が物理学ノーベル賞を受けた年は敗戦後四年の昭和二十四年の事。新制大学の発足。法隆寺金堂壁画の焼失という忌まはしくも悲しむべき出来事の発生した年でもあった。占領下にあり、戦争による物心両面の大打撃の衝撃をうけた後でもあって、人々は生物人間として単に生きるだけで、精一杯、右往左往の時代でもあった。

教授は程なく渡米、四年ほど滞在し大学等で講義、講演などにあぐれ、帰朝の暁、毎日新聞紙上に彼地で直接肌に触れ感得したアメリカ人の人間関係についての微妙な心情に触れた一文を寄せている。

敗戦僅か四年後の当時の日本は、いはば全国民はどん底の窮乏生活の日々に明け暮れていた有様だった。一部の人は心も荒々しく刺々しい気風に壓せられてもいた時代とも言える。前年二十三年には、東條英機大将以下七名の重臣らに、A級戦犯と裁定される最終判決が下って絞首刑が執行されている。不法にも法の美名の下に処刑は決行せられた。心ある異国の人も国民も共に不当な判定と処置に対し断腸の想ひで憤りをぶちまける。

湯川氏は出発に際し、彼我の現実の日常生活を、物資の面から比較し、米国民は我国民に比べると、数倍をこえる

豊富な物資に恵まれているからして、さぞ幸福な日々を過してをらうか、と心秘かに思つて渡航したそうである。

一年たち二年過すうちに、右の予想は影を薄め潜めて、アメリカ国民の生活は、予想に反してまこと惨め且つ不幸であるとの実感が次第に強くなり確信を深めるにいたつたと述べている。形而下の衣食住・日常生活の面で我に数倍勝れていることは覆うべくもない事実である。然し人はパンのみで生きるものにあらず。彼らの心の点、交遊のある人々との相互関係の心に視点を合はせて観察すると、彼らは必ずしも倅とはいえないと確信するに至つた由である。

米国民とても社会生活を営んでいる点では、我々と変りはない。外観的にみて人間関係は立派に成立している。古今東西をとはず、形式上の人間関係の欠落した地域・時代は凡そあるまい。問題はその外観・形式にある訳ではない。人間関係を成立せしめている内容こそ問ひの対象となる。一見まことに華やかな人間関係は、まことには逆説的に人間関係の真の内実を語っている。華麗な外観は、ギクシヤクな内実の覆ひにすぎない。職場の人間関係は相互の間で「それとなく」「何んとなく」なされている。夫婦間のそれですらも、彼らは単に「辻褃を合は」せている間柄・程度に止まっているとの由。とすると、友人・同僚関係の内容は推して知るべし、とならう。

以上の点からみると、相互の間に、心と心との結び付きとしての関係がないも同様で彼らは孤独者である。その心の孤独者たる原因は、西欧思想流の個人主義にある、と氏は結論を下す。

妻に対してすら「辻褃を合せている」アメリカ人の夫婦関係は、「良人は妻を労りつ、妻は良人を慕う」と語る浪花節の一節に共感・共鳴し溜息を洩らすに躊躇せぬ日本人には、摩訶不思議な間柄として映る。かやうな人間関係であつてみると、アメリカ人の婦人に対しての礼節は、日本人の心情を規準にすると、懇切丁寧であればある程、実質には慇懃無礼である、と理解されても当然ではないか。

湯川氏の観察した結論への批判は兎も角として、次のやうな報道或は理解し得た近世の西欧人間観を思ひ浮べると、

湯川氏の話は、的外れの皮相な見解であるとか、誤解に過ぎないとか云々するのは、逆に批判こそは的外れ論と再批判されまいか。

アメリカ人の間の相互関係はいつてみれば、相互の不信感に由来するのではあるまいかと推察される。ではその不信感のよつてくる所以は何んであらうか。

#### 旧約にみるGODと人及人間関係

GOD(以下Gと表記)は、第一日目に天地を創造し、二日目に蒼穹を、三日目には大地と樹木・草等を、四日目に光と暗と、太陽・月・星を、五日目に生物、魚・鳥など、六日目に到り、Gは改めて「我儕」に象りて、我儕の像の如くに我儕人を造」らんと「エホバ神 土の塵を以て人を造り 生氣を其鼻に吹入たまへり 人即ち生靈となりぬ」

(創世記第一・第二章)。

かくて人間は世に現れた。

この人(生靈)はアダムを指す。次にアダムに「適う助者」として、アダムの「肋骨の一」から造ったのがイヴ、女性である。Gは兩人に「善悪を知る樹」は食すべからず、と嚴重に言渡し、エデンの花園で自由に暮すことを許す。狡猾な蛇は、屢々兩人に禁断の果实を食するようにと教唆を繰返す。遂に兩人は誘惑に負け食べる。兩人は初めてここに恥羞(知恵)を覚えるにいたる。Gは激怒し、蛇を先づ詛ひ、兩人に対しては次のやうな宣言を下す。神命に背いた罪に罰を下す。

我汝と婦の間、および汝の苗裔と婦の苗裔の間に怨恨を置ん 彼は汝の頭を碎き汝は彼の踵を碎ん(第三章一五) 加へてエバには「懐妊の劬勞」の増すこと、妊娠時及出産の折りには苦痛を味うこと、アダムに対して「汝は一生のあいだ勞苦して其より食を得ん」と宣言する。上記の文言の行間から、人にとって、労働とは、日々の生活の営みと

は如何に勞多くして報いることの少きことか、即労働とは苦勞也との労働觀が読みとれるやうなことを申し渡す（一六・一七）。

アダムから十代目の末孫のノアの時代になるや、Gは人間の営み、人間の性格について次のやうな判断を下す。「人の惡の地に大なると、其心の思念の都て凶<sup>スベ</sup>維<sup>イカ</sup>る所の恒に惟惡<sup>コレ</sup>きのみなるを見たまへり」。Gはかくて最早我慢もこれまでと、見切りをつけ、人類を地上から抹殺し掃討せんとの意を固めて実行する。

この間のGの意向は、聖書旧約に次のやうに叙述されている。

エホバの地上に人を造りしことを悔い給う。

我が創造りし人を我地の面より拭去ん 人より獸昆虫天空の鳥にいたるまでほろぼさん（第六章六・七）

Gの下した結論は己の創造した生類の絶滅である。では生類一切を地上から抹殺する手段は何か。「四十日四十夜地に雨をふらしめ」ることである。水責の刑である。中にノアの家族のみはGの意になつた者とみなされて、家族の食糧として若干の限られた畜物、鳥類と共に死の罰から除かれる。他の生類は悉く四十日に亘る昼夜分かたずの霖雨と大洪水に見舞はれ、地上から拭ひ去られる慘澹たる目に遭う（第七章一・四）。

以上の旧約の記述から読みとれるGの意図は凄じい！ の語に尽きまいか。日本人我々にとつての理解を遙かに超えた彼方に秘む我々の了解しにくい異質・異様の怨念・心情との感が深い。この記事の語る、内部に秘んでいるGの意の如何なるものか、については神学はそれなりに説明をし辯護を試みるであらう。GはGなりに吾人の推測し得ない幽玄な神意の許で決断し決行したものであらうから、兎角の批判は慎しむべく、軽々しく云々することは避ける。味読すると、ただ何んともやりきれない心情に満たされていることを告白する。

この記事から、次の三点が了承されやう。

一 Gと被造者人間との関係

二 Gに対する人間の心情

三 被造者人間同志の関係

一の点を先づ考えやう。ノアの一族はGの恩寵を蒙り神意になつたものとみえ、水責めから除かれて尔後生きつづける。とすると、現存する人類にとつての始祖ともいえる人は聖書の語るところを認めると、正しくアダム・イヴであらう。処で現存する人間一般の祖となると、話は別とならう。Gの意に適つたノアこそが、現存する人間の始祖に該当するのではあるまいか。アダムとイヴとは天国からの追放、労働の重苦、出産にあつたての苦しみ等によつて罪は贖ひ済みではなかつたのか（とも、かく思考することがキリスト教神学に一致しているか否かは判らないが）。加へてアダム・イヴから十代後までの子孫一般は、大洪水に見舞はれてノア及びその一家と僅かながらの生類を除く一切の間及び生物は絶滅した。これも神意による。人間の罪は、これらの償ひですべて清められたのではないか。

この点は、非キリスト教徒の筆者にはどうも納得しかねる。信者でないから了解し得ない、と極め附けられるならば話は別になるも、理解しかねる。

アダム・イヴの処罰によつて、アダム・イヴの罪は贖はれたものではあるまいか。これでアダム・イヴの子孫は、罪から解放され、白日晴天の身となつたのではあるまいか、と判断するのは筆者の高慢不遜であり、罪意識のない不埒者の思ひ上りの心であらうか。キリスト教国の知識人の間にも敬虔なキリスト教信者の中にも、この点に疑念を懐いている人のおることは説明の要はあるまい。

キリスト教神学では、この点の教義については充分説かれてをることであらう。ノア夫妻家族ともども、アダム・イヴの子孫である以上は、Gの眼鏡にかなつた適格者であつたとしても、他の人間に比較しての適格者に過ぎぬ。完

全無欠なる人格者でない。とするとGの意に100%かなった者ではなく、相対的な適格者とみることが改めてGの罪を受けるのは当然である。原罪信仰は依然として生きていて至当也との解釈としても成立つ。

それにしても、了解される現代の西欧人（全てがキリスト教徒として敬虔者でなくとも、キリスト教を教養として身に付けている人の意）は、いつてみれば個人主義に徹底している、といはれる。湯川氏のアメリカ人不幸説も、個人主義に由来するとみている。他人は他人、己は己。この自己中心の考えを個人主義とみると、気の遠くなる遙かなる過去に生きた先祖の犯した罪を、そのまま己の罪と確く信じ、Gに赦しを禱る西欧人の心情は、我々には仲々了解し難い純情さを感じるが、次の点を想起すと案外なことに、日本人流の意識に近いとも考へられまいか。

テル・アビブ空港の無差別銃撃殺人事件を考へてみよう。犯人は日本の過激派の青年であった。福田首相は、無法者の要求を容れて死刑宣告者を獄から釈放し、飛行機を仕立て、税金十五億を土産物に要人が出掛けて一応の事件の解決をみたことは記憶に新しい。

当時の世界の輿論は、日本政府の処置に対しては冷笑的だ。且つ驚く。特定日本人の犯罪に対して、他の国民（政府）が責任を負う理由はない。一切の責は犯人個人が負うべきが道理。政府として、犯罪に全く係りのない他の国民を代表し、犯罪者に代つて政府当局が非を認め責任を感じ詫を入れ、剩へ莫大な代償を国民の税金で賄つたことに對して、外国では奇異に感じ、了解し難く、納得をしない、との点で意見の一致をみたことは周知の通りである。

親は子の罪を庇ひ、子は親の非にいたく自責を覚えてひたすら謹慎の意を表することは、日本人にとっては当然の心意・所為とみて納得する。徹底した自己中心のミーイズムの異文化、異邦人にとっては奇怪至極の所為と映り判ぜられたとしても、それはそれ、これはこれと區別して日本人は処理を下す。文化・伝統の彼我の間に、差のあることを承知することで事は済む。この点、文化、伝統の差は価値の問題ではない。価値観にもとづく評価は慎むべく、妥

当でもない、と考える。

自己中心主義の信条を人生觀の核に据えた現代人の中にも、キリスト教徒となると、人類の祖アダム・イヴの原罪を継承し、罪の償に信仰の核を認めて、信仰に懸命である点、日本人の懐いている近親者間の罪意識に頗る近似性が認められまいか。とすると日本人相互の近親者間に懐く共同責任的な罪意識は、この点に留意すると、必ずしも彼我に橋渡しは絶望ではない訳ではない。奇怪に外国の眼に映る日本人の共同連体意識とて、全く彼らの理解し難いユニークな心情とは言へまい。

彼我の差を指摘するとしたら、一方は唯一絶対なGの嚴命として受取り益々服膺することであり、他方は神とは直接に関りなく、親子親戚という血縁を通じての自己規制的道義觀念に基づくものと言える。

アダム・イヴの犯した原罪を、子孫である現代人までもが各自一人一人意識する心情は、日本人の近親間の罪意識に対しての心情に頗る近似性があるまいか。暗合してをるまいか。とすると、日本人我々の近親間の罪意識は、全くユニークなそれで異邦人には了解し難い心情でもあるまい。異文化国家のキリスト教者として、この点に想をいたすと、日本人の心情は彼らに全く無縁であり理解し難いそれではなく、賛成せずとも理解は出来やう。

アダム・イヴの犯した罪を、二〇〇〇年後の今日、己の罪と確信して憚らない西欧文化の洗礼者が居るとしたら、至近例としてのテル・アビブ事件への日本人の対応・反応・処理策は固より、親屬者間の連帯意識的罪意識に対し賛成せぬまでも、積極的に異質なものとして拒否することもあるまい。

政府の処置に対しての、外国からの批判に真面に辯護するつもりはない。政府の処置にも一つの条理が通つておる。その条理とは、近親相互間の連帯感に近い意識、同朋の共同責任感ともいうべき、暗黙の民族的共通の心意が伝統的に実存しておつて、これを基礎として具体化した行爲が、政府の執つた処置ではあるまいか、と指摘したまでである。

事実に対して下した一試論でもあり、一私見でもある。

筆者が拙稿で些か論じたい点は次の一点にある。

日本人の宗教は、というと仏教也と大方理解する程度に、日本人は、西欧・アメリカ人の宗教はキリスト教也と大雑把な巨視の判断を下す。この程度の理解で云々するのはちと烏滸がましいが、正統キリスト教信奉者である西欧人・アメリカ人が、彼らの祖アダム・イヴ或はノアらの罪を、二〇〇〇余年後世の己も亦アダム・イヴ同様背負っているとの信仰を忠実に懐いているなら、他人も己と同様に罪人であるものの、相手に不信感を抱かず、同病相憐むの誼みで、相互に寛容な態度がとれないものか。彼らの人間関係の、自己中心の利己・個人主義を克服し、滑らかな友交状態にならないものか、と考へる次第である。

原罪意識をキリスト教神学により植え付けられた彼らは、自己不信と同様に（妻をも含めて）、他人不信感にまでも毒されてしまったのであらうか。悲しむべき不幸である。

次に、Gに対する人間側の心情はどうか。

人間側は、可憐なことに、Gの意向とは逆である。片道、一方通行的に、Gに対してはひたすらに清潔・純情な思慕の信仰を捧げているかにみえる。バベルの塔の話がこの事情を語っていないか。

当時生存し生活しておる人類は何れもノアの子孫等である。恐らく血統の近い人々がそれぞれの地域に集落を形成し日々の営みをつづけていたのでもあらう。

全地は一つの言語 一つの音のみなりき（第二章一）

同一の言語を使用する人々が、つまり一民族としての人々が、各地に散在していたとみえている。そこで、彼らは、東方のシャルという地点に各地から集合して、邑造りをし瓢石（瓦）を造る。彼らは邑造りと併せて天にまで届く塔



を建てる。彼らは「全地の表面に散ることを免れん」と議して、邑造りと塔建設の作業にとりかかる。

エホバGは天から降り、彼らの作業をみる。人々は同一文化の民として同一の言語を語り合ひ、街造り、塔の建設をしている様子を見て言う。

去来我等降り彼処にて、彼等の言葉を消し互に言葉を通ずることを得ざらしめん（同章七）

結果は神意のままになる。人間たちは、その場に街を建設し塔を築くことを断念し、再び各地に散りくゞに分れ住むことになる。分散した人々は、直て同一の言語の使用をとり止めて、尔後、それぞれの地域の集団には、それぞれの言語が形成され使用されるやうになる。言語の乱れがかくて起こった。バベルとは淆乱の意味だ、との説明が付されている。

ノアの子孫らの念願は、一つには一つの街造りをして子孫らは団結して生存したいこと、二つには天にまで届く塔を建設することにあつた。同一言語を語る人々とは同一文化の同一民族の謂である。そこで彼らは一集団、一国家を建設したいとの悲願を懐いていたと推察される。では第二の塔建設の目的は何か。この点旧約には語られていない。ここに宗教にみられるミステイシズムの存在理由が読みとれる。宗教とは本来、泥土臭いものだ、と思はれる。理性に則り、合理的に体系化される神学とはいはば蒸留水の如きもの。蒸留水には身体にとつて害となるやうな要素は一切除去されている。よつて純粹な水である。されば結果として自然物としての身体の健康維持にとつて不可欠の要素は全く皆無。他物から補充せざるを得ない、毒にもならず、薬にもならないもの、これ蒸留水。

「人間、これ理性的なもの」。この人間は、蒸留水だ。蒸留水は、人工的に創作し得る。しかし蒸留水人間は創造し得ない。まして現実的に生存しておらない。現実の人間は、理性者 $\alpha$ である。知・情・意の三分説を借りるなら、 $\alpha$ は情と意に相當する。フランス生理学者シャルル・リシュ曰く、「人間・愚かなるもの」。泥土臭さは、人間の重要

な一面である点も無視してはならぬ。理性万能者から愚者と蔑視されることも。実体の見逃しは許されない。理性至上主義のもとに組織せられる教義では信仰心が満たされず慍然なく感ずるのは、生の、現実の人間にとっては当然のこと。ここに何れの宗教にも、この生の、現実の人間性に対応し、満足せしめる如き別の教義が唱えられる。神秘主義的な教理がこれである。仏教の密教がこれに該当し、理性主義合理主義的な顕教に対応する。

神秘思想の一つの特徴は、聖なるもの、との冥合と言える。バベルの塔の建造を思ひ立った人々の深層心理は、この密教流の衝動といえる。自然人として（理性信奉者、合理主義至上者ではない）は、全人間として生きている。何らの人工的手法加減を施かれぬままの、非人工的であり、荒々しく野生的で洗練されておらぬから泥土臭い野暮ったい人間として、精一杯の熱望が彼らをしてバベルの塔建設にまで驅り立てたのではあるまいか。Gとの共存、Gとの冥合（Gに直接的になんらかの方法で触れる）こそが生身としての愚かしい人間の生き甲斐感の充足ではなかったのか。これの神話化こそがバベルの塔の話と実ったと思はれる。

では他方Gの思惑はどうか。ノアの子孫らの懐く悲願を無惨にまで撃ち砕き拒絶したGの心情はどのやうなものであろうか。この辺の事情として不明。揣摩憶測に委す外には術はない。結果からみて次のような解釈も成立つまいか。人々が一ヶ処に集り一つの集落をなし、同一の言語・同一文化の下で生活することを、Gは歓迎され賛意を示されなかったことは確かである。バベル、言語の混乱を将来したのはGである。

言語の混乱は、言語の多様化、文化の多様化である。言語・文化の多様化の齎らす結果は、人々の意志思考の多様化となる。言語・思考の多様化の国家はそれだけ統治には困難が伴う。ユーゴスラビアは社会主義連邦共和国と公称セルビア・クロアチア・マケドニア・モンテネグロの主要民族がそれぞれ共和国を形成し、言語をそれぞれの共和国に応じて使用している。一九八〇年のチトー大統領の死後は、集団指導体制をとり、共和国、自治州の代表者によ

る会議体制型をとって国家の運営に苦心を払っている。

一つの言語を共通語として日常に使用していた集団が複数に分れて、別個な複数集団を形成する。時代の経道に伴って、それぞれの集団には自づと個性が芽生え生長する。それぞれの集団の生活に密着した生活態度、自然への対応が生れ育つ。文化と呼ばれるものがそれである。分散の結果は、再び同一歩調で、共に生活することは容易ではない。分散を望まれ決行せられたGの意図は那辺に存していたのでもあらうか。divide and rule流のものではあるまい。茲にプラトンの「饗宴」が想い出される。現在の人間は、性別上では男と女とである。ところが曾ては、男と女との単性人間とは別に「男」と呼んでよい男女両性を一身に具備している人間が存在していたそうだ。この両性人間は男が一身である故に、一人でありながら人間の機能の点では二人前を完備する。手・足共に四本ずつ所有する。力も普通人に比して二倍ある。カミはこの異常な強力人間を怖れて、真半分に両断する。男人間は、男と女に切断される。二分されたそれぞれの男と女とは、旧の状態を頻りと恋しがる。分れた相手を相互が求める。これが抑々恋愛也とその起源の説明をしている。

単一民族乃至単一言語国民として生活することと、複数言語民族乃至は複数国家として生活することと、何れがより平和に共存し得るか、といったことを、あれこれ抽象的に論議することは避ける。

生活上、先づ大事な点は相互理解であらう。相互理解に際しては、同一言語を共通語として使用している人同志の相互理解の密度は、異言語同志の人との相互理解の内容に比して、濃く深く、正確度は高い。それだけお互ひは、正確に深く相互の共通点と相違点とを了解し合ひ、解決の道への方策も採り易く実行も速かに移せる、といへる。

人間相互間の理解の点で、同一言語使用者同志では、繊細微妙な心情の相互理解では一日の長はあらうが、反面短所も亦ある。異文化、異言語使用者間には、接触を通して刺激をうけ、触発されて、変容・発達の機会があるが、こ

の点、単一言語人間には欠けておるし、あつたとしても最少に過ぎない。後進諸国がこの点を語っている。

引続き、Gと人間との関係について触れたい。

天地創造の第一日目から算へて六日目に、Gは人間を創造された。この人間は、天性クリエーターの意に逆く者として造られたのではないらしい。禁断の果実は、知恵の実とも言はれる。善悪を判断する能力・機能は被造者としての人間には生来備はり内在していたものではない。禁断の果実を食することによって、後天的に獲得した機能である。しかも莫大な代償を支払つて身に付けた貴重な能力でもある。

人間が知恵を獲得した経緯は、旧約では神命に逆くことの話として語られている。ギリシャ神話の語るところでは、ゼウスを欺いて火（知恵）を太陽から得て寒気に震えていた人間に与えたことで、鎖に繋がれたプロメテウスの悲劇を生む。聖書によると、知恵の獲得にたいする代償は労働である。この労働は、人間が生きるためには不可欠な作業であり、且つ苛酷な（処罰の意も含めて）嫌らしいもので、楽しい態のものではない。出来ることなら避けたい。避けたら生命が覚束ないことは自明。さらば少しでも、他人より楽をして多くの報酬をえたい。楽をしたい怠けたい性根も、知恵諸共に人は、身に付けたのではなからうか。

幸い厳しい労働でも、休憩すれば疲労は回復する。収穫の飲みも味はうことが出来る。しかし人間関係の間の軌み、憎しみには生涯断ち切れぬ宿命がある。何故なら他者と没交渉では生きられぬのが運命だから。今生では終焉がない。

神、汝等が之（○知恵の実）を食う日には、汝等の目開け、汝等神の如くなりて、善悪を知るに至るを知りたま

うなりと（第三章五）

「善悪を知る知恵」とは、どうやら大変な価値なもの。人間の次元では到底理解し得ぬやうな機能を果す。食するや「汝等の目開け、汝等神の如くなりて」とみえる。ここのGは天地創造者であつて、唯一なる全知全能者であるとする

ると、知恵を得た人は、忽ちにGに比肩する抜群の有能者に成り上った訳だ。人間が「神の如くな」ることをGは歡ばない、嫌悪する。よって果実を採り食することを嚴禁した、と蛇は繰返しイヴに言ひきかせて、遂に食べさせた。とするとGの怖れたことは、人間がGと比肩するにたる威力者になることに、どうやら理由が秘んでおるらしい。比肩する者の出現の結果はGの絶対性、即ち唯一性は喪失し自づと相對者と化して、絶対者の位置から転落する。

宗教学上、諸宗教の分類については、さまざまの分類がある。その一つに、信仰対象と信仰者との關係・間柄に注目し、カミと人間との両者が全く異類・異質のものとみなす宗教を神人別格教、神人隔絶教と名付ける。他に両者を同類・同質のものとみる宗教がある。神人同格教・神人融合教と名付ける。この分類に従つて論じたい。

人は神の子孫と認める神道、或は悉皆成仏を説く仏教は共に、神人同格、融合教に分類される。ユダヤ教とキリスト教とマホメット教等は、神人別格である隔絶教に一括される。

人は果実を食した。Gは「夫人<sup>カ</sup>我等の<sup>ヒト</sup>一の如くなりて」(第三章二)と言う。Gの仲間入りをした、Gになったとは認めていない。「如くなり」である。Gと肩を並べる威力の所有者となつた。「善悪を知る」能力を得たと了解される。「善悪を知る」ことはGの権限であり、本来は、人間の関与する領分ではない、との意であらう。それにしても、人間は、果実を食したことで、今やGの所有する権限・權力の一部の能力を身に付ける程の威力者と変質した。Gはかやうな威力を獲た人間の、今後の身の振り方・行動、特にGへの対応について危機を感じたのではないか。バベル(清乱)の塔の話はこの点を語つてをるかによめる。

Gと人との間柄については概略以上のやうに理解される。

更に人と人との間柄をみることにする。

人間同士、特に男性と女性、良人と妻との間柄はどうであらう。人間相互の間柄といつても複雑である。親子、友

人（親疎によって相違はある）、同僚、兄弟姉妹、夫婦、買手と売手という具合に、その人間相互の関係は複雑且つ微妙なものがある。中で相互が緊密な関係に置かれている関係の一つは夫婦のそれであらう。言葉通り夫婦は、肌の触れ合う当事者であり裸の付き合いの間柄といへる。裸の付き合いには原則上相互は隠しだては出来ない。あり得ない。処で、湯川氏はアメリカ人のそれについて当事者同士は「何んとなく」「辻褄を合はせて」の生活を送っている、と語り、彼らは倅でない一例として挙げてゐる。

「和而不同」るのが君子。「同不和」るが小人の由。ユダヤ人にとっては、満場一致などあり得ないとして、日本人のそれをベンダサンは訝つてゐる。

全員賛成は和した結果。形式上一致をみたことになる。内容的にみて、各人は細部の機微な点で必ずしも一致した訳ではない。マアマア或はベターとして議題に和した。大方の決議はそうであらう。従つて、消極的賛意の人も少なからざる筈だ。「不同」の読みはこの程度であらう。

徹底して自己主張を各人が頑強に固執し、一步半歩すら譲らうとせぬとしたら、議論は限りなく展開されて、結論への結着には相当の時間はかかる。恐らく論議は徒勞に終はることもなかりかねない。何らかの結論をみぬ以上、事態の進行或は解決はあり得ない。満場一致はあり得ない、という論理は、裏を返すと万人にとつて、万人等しい満足はあり得ないとの悟り、若しくは英知の論理ではなからうか。茲に会議等で要求され、必要不可欠なことは、互譲の精神ではなからうか。

ユダヤ人にみられるやうに、自己主張を終始に亘つて筋を通すのが正しい道理であるか、日本人にみられる「和而不同」流の全員一致が道理であるかについて、二者択一し、価値的に評価を下すつもりはない。価値判断は容易ならぬことである。判断の規準が先づ明確にされて後の課題とならう。人間の知恵でそう易々と評価を下すことは避ける

べきと思う。何れも歴史的伝統の文化所産である。時間の経過、両文化の接触・交渉の裡に、相互影響が生ずるやもしれぬ。平行線を辿るやもしれぬ。相互は、それぞれ自国伝来の文化を固執するも宜しく、他に範を取り入れて修正乃至自国伝来のそれを放棄するも宜しからう。何れにしても合理至上主義・理性優位の偏重主義乃至は自利主義を無類の全科玉條視する小賢しいドクマの誇示は、徒らに紛争の火種の提供か激化を齎らす徒事に終らう。

友人、同僚間は固より、そうあつて欲しい夫婦間においてすら琴瑟相和することのなしえないアメリカ人の人間関係の因つて基づく原因を、西欧個人主義に、湯川氏は求める。個人主義の理解如何にもよるが、茲では自利・自己中心主義と同義にとつて論を進める。

湯川氏の感想は、湯川氏周辺の人々との交際の中から観察し、感得し、学びとつたものだが、感想は偏見ではない。裏付けとして、一つの例を示さう。

昭和二十年代末の発行と記憶するが、「アメリカナー」という學術雑誌で、昨今アメリカにはWANA運動と呼ぶ運動が起つてると報じていた。WANAとはWe are not aloneの頭文字の組合せである。(我々は孤独ではない)とのスローガンを掲げた運動である。孤独でないは一種の反語とよめる。我々の一人一人は独りぼつちだ、お互はサア手を繋ぐがう、一緒に手を執り合つて生きようではないか! との、孤独者らの悲痛な、心底から迸つた真実な叫び声ではあるまいか。手を執り合ふとは、心も亦開き相通せんとの意を示す。胸襟をひらかず形式上、ただ手を繋いでいたのでは、内心は依然孤独のままに終る。

スローガンの趣旨は、現在のアメリカ人間の心情不疎通こそは、彼らの不幸の元兇也との強い自覚から生れた反省、その反省の悲痛な叫び呻き声とも聞える。

人間は、生れ付いて家族と呼ぶ最小単位の中に、親のコとして孤独者としてではなく、オヤという他者との關係的

存在者として生命を受けた者である。これは事実であり且つ、自然の状態といへる。この自然の枠組から外れた結果、孤独という奈落の底に転落し、心の寂寥さに悶え苦しみ悩み喘いでいる。自然に反逆した者の受ける当然の責だ。

高価な代償を支払って漸く悟り得た境地に到り絶叫したのが、この句であらう。単にアメリカ人のみならず、西欧はもとより、最近の同朋中には、自己・自家中心の傾向が著しく強く、国家・社会との連帯・奉仕の精神、運命協同体意識の欠落・稀薄さの目立つことは憂慮すべき点と云へまいか。

生れ付きの自然の状態を、素直に生活の基本原則として認める。この原則を肯定するか、自己は他者との關係的存在者たることは不都合であり、不合理であると否定し反論するかによって、人間觀は二つに分れる。

關係的存在者たることを肯定すると、この事実の状況下で、相互に生活の道を探り求めつつ生活を拓く努力を惜まぬことになる。關係的存在者としての生活に不満を覚え、自己の自由を損ねると判ずるや、そこよりの脱出を計らう。後者の場合は、相互共に相手に対しての不信感に由来する。相手は、不信者なるが故に、深く交際すると、己の幸を損ねる。そこで關係を断ち切つて、一人になる、孤独者となる、とみられる。

ソフィストのプロタゴラス Protagoras (B. C. 500-430) は「人間は万物の尺度云々」と説く。後世になるとこの句は、消極的個人主義、自己中心主義思想と解されることにもなる。以上の句には「あるものについてはあるということの、あらゆるものについてはないということの」との一文が続く。かくて一切の判断の規準は各個人に存してゐるとみる。ものは、みるそれぞれの個人にとっては見られてゐるやうなものとして、そのままにある、という。それ以外に普遍的にあるとか、すべての人に同じ様に客觀的にあるものではない、とも説く。この論は注目する主張と思はれる。

この句はソフィストとしてのプロタゴラスの自己の学的立場の根拠付けでもある。個々の人間、我も汝も共に尺度



である。従つて我も汝も共に従うべき共通の、普遍の一定不変の尺度、真理などと呼ばれるやうな絶対的客観的基準などはありえない。そこで弁論術を修得し、弱い議論でも強い議論に仕上げ、相手を納得させることが出来るのだ。ここにソフィストの役割が存することになる訳である。

更にこの句は次のやうにも理解は出来る。

己に左様にみえるやうに、汝にも己に見えてゐるのと同様に、見えてゐる筈だ。否、見えるべきだ。仮に見えぬとしたら、汝の視覚に欠陥があるからにはかならない。結論すると、汝が見ている姿、汝に見えている姿は眞の姿ではない。眞の姿は、我に見えている通りであるからして、汝に見えている姿を、汝は否定せよ、謬りと認めて、我に見えている姿を眞の姿と信せよ、という風の解釈へと展開する可能性もある。

自己絶対、自己中心の個人主義思想の一つの温床として、この句は読みとれる。プロタゴラス自身の哲学から遊離し独り歩きをし、別個の路を進むこともあり得る訳だ。

プロタゴラスは判断の多様性、価値の多様性をこの命題を通して主張し、よつて価値の相対性を認めた上で、より強い主張の可能性を示し弁論術の学修の有効性を説く。近代風の個人主義を唱え、自利主義を説いたわけではない。学問は真理の探求に在るといはれる。では真理とは何か、となるとプラトンのイデア論から始まって、結論は收拾のつきかねる程、纏まらない。先づ大事なことは真理を求める方法、手段をみても古代以来一貫して唯一ではないことは哲学史が語つてゐる。ギリシャの時代には、所謂弁証法(Dialektik)が真理探求の唯一の方法とみられてゐたし、問答・対話の技術によつた。問答・対話を媒介として真理の追究並に獲得の可能性を認めたのである。

次の時代、中世では聖書のみが、真理を解明なし得る唯一の権威ある拠り処とみられてゐた。

父が西暦三〇六年に死去した後、コンスタンティヌスは滞在地の英国のヨークを發ち、イタリヤに帰つて皇帝に即

く。当初こそ彼は当時の信仰である太陽神を崇拜し、その力にあやからうと努めてをつたものの、帰路に天空に輝く十字架等を見て啓示と信じ、キリスト教に帰依する。茲にローマ帝国はキリスト教帝国として発展する。

西暦三八〇年に至ると、テオドシウスは、キリスト教の信仰を勅令によって公布する。非キリスト教徒を「痴愚にして狂気と判定し、邪教信者の恥辱を与え」処罰するようにとまで、キリスト教は帝国内に牢固とした地盤を築く。コンスタンチノーブルでの東方教会は、皇帝に付かず離れずの関係をとり、寧ろ司教は皇帝に臣従していたものの、西方のローマでは反対に皇帝権に対抗する司教が多かったという。ミラノの司教アンブロシウス(333-397)はその代表者である。対皇帝関係を注目すると、東西キリスト教は別々の路をとる。

三九〇年、皇帝テオドシウスが、ギリシャで戦車競技ファンの暴動に激怒し数千人の暴徒を兵士に命じ殺戮せしめる大悲慘がおきた。司教はこれに対し、皇帝が国民の面前で罪のつぐないをするまで聖体拝領はさせぬ旨を宣言する。暫く皇帝は、教会を避けてはいたが遂に教会に屈し大衆の前で罪の宥しを乞う。この事件は、司教の厳とした信仰上の態度のあつたこともさる事ながら、当時の帝国内でのキリスト教徒の動向の実態についてはつきりと語る出来事と解される(バンバー・ガスコイン『ザ・クリスチャンズ』四五頁)。

一般には余り注目されてはおらない事実であるが、と断りながら山本七平氏は、中世には、聖書は一般的系統的知識の基準、いはば一種の百科事典の役目を果していた、という。ワニを知りたいときには聖書総索引のワニの項をみとみる。何か事がある度に、その都度聖書を百科事典みたいに参考にして事柄を決めていた面がある、と述べている(『日本人と聖書』二一九頁)。

これらを参照すると、所謂四世紀以後の約一〇〇〇年間の西欧の中世という時代の学問、真理についての思想、概念の輪郭が臆げにはあるが把握出来やう。中世末、近世の曙の頃の宗教と科学との争ひ、キリスト教と新興科学と

の真理探求の方法をめぐつての峻烈極まる血流の首座争ひの根柢についても大体の見当は付かう。

#### 古代の真理追求の方法

ギリシヤ時代には、真理の探求に当つては、肉体を媒介としては求められなかつた。不可能であつた。何によつて求められるか。靈魂によつてのみ獲得される、とプラトンは説いてゐる。暫く「バイドン」を借用して彼の哲学に耳を傾けよう。

生きてゐる、ということとは、靈魂と肉体とが共存してゐる状態を指す。哲学者の正しい使命は、もの知りとして雑多な知識を豊富に記憶してゐることにあるのではない。フィロンファーは、正しい知恵の探求者を指す。それを目指して努力する人でもある。処で、この肝心な正しい知恵は生存中には到底身に付けることは出来ない。「われわれの靈魂がこのような悪（肉体）と混り合つている限り、われわれはわれわれが望むもの（正しい知恵、真理）を断じて十分に獲得することはできない」「もし靈魂がこれらと（眼や耳、五感の中の視覚と聴覚、即肉体を指す）共同する場合（生きてゐる間）にはいつでも、靈魂が真理と知恵を獲得するのを乱し且つ妨げる」（66）。では、肉体との共存中、即ち生きてゐるとき、靈魂が如何様に真理の獲得を希み努力を重ねても到底、獲得しえない理由とは一体何か。以上の文句で大凡そはつきりしてゐる。

もしひとが（真理の）探究において、肉体を共同者として参与させるとしたら、邪魔になるだろうか、それともそうじゃないだろうか。わたしが言いたいののはたとえ次のようなことだ。いったい視と聴とは、人間たちに何らかの真理を供給するのだろうか……このようなことは詩人たちもわれわれに常に繰り返して言つてゐるではないか——われわれは何ら正確なことを（視と聴とにより）聞いたり見たりはしない——とね（65）。

「肉体によつて欺かれる」（65）。靈魂が肉体と共同している限り、即、人は生存中、ということとは、靈魂が肉体と一

緒におることである。肉体と靈魂との共存中（生きてゐるうち）は、肉体を牢獄に比喻して、靈魂は肉体から解放され自由に駆けめぐることが許されないから、真理を獲得が出来ない、とみる。真理は、靈魂が肉体の束縛から解放された暁、靈魂の活動の自由を獲得してから、始めてもとめられるのだ、と説く。裁判の不当性を万般承知し、知己友人らの釈放運動を斥け、深く従容毒盃を喫して死に就いた理由もよくわからう。

肉体（感性）の機能を全く無視したプラトール哲学からも乃至は聖書を真理の書と絶対視した中世教学からも、実験・観察という感性・肉体の機能を認めて、この機能を媒介に真理・普遍性を求めた近世の自然科学は、何れからも発生し得なかつた事實は、科学史・思想史が語つてゐる。

特に中世哲学からの期待は絶望である。近世は中世からの脱出、中世から徹底的に脱脚したとき、初めて成立する。近世の成立は、感性への信頼感の確立に緒がある。プラトール哲学の克服が前提となる。次に聖書の真理性、全能性の克服が要求される。聖書が万能であり真理の書である限り、学問とは真理の探求也と申しても無意味にすぎぬ。聖書が真理の書として厳存している限り、真理は人類に既に与えられてゐる。今更、真理を求めても二番煎にすぎない。聖書を真理の書とみなす哲学からの脱出、否定こそが近世科学成立の第一歩といへる。

近世科学の成立の必要条件は、古代とも中世とも違つた哲学の樹立にある。いつてみると肉体を有する人間の再評価、再認識にある。再評価・再認識とは、肉体の機能を指す。実験・観察は自然科学研究の方法である。視・聴等の機能を媒介に、事物の実験・観察の結果から得た諸々の事実から帰納して、一つの原理を求める。この原理こそは、時空を超えて普遍且つ妥当するもの、真理也とみなす。肉体の素直な見直しから近世科学は発生した。

ギリシヤ時代では、真理は、靈魂、理性（感覚によらず）を通して会話、産婆術によつて獲得される。中世、キリスト教スコラ哲学によると、真理は、人間が求めて得られるものではない。Gによつて、聖書を介して予め人間に与

へられてゐたもの、既に啓示され与へられて既存のものともなされてゐた。如て、自然科学においては、実験・観察という方法を真理探求獲得の唯一の方法とみなす。凡そ、学問は真理を求めるとしても、求める方法に注目する限り、以上の通り古今一貫してはゐない。西欧の学問史は以上のやうな、研究方法に変遷のあることを示してゐる。

実験・観察を通して、複雑多岐を極めてゐる自然界の現象・事象間から、一つの共通する筋、原理・原則を帰納し求める作業、これが自然科学の操作である。

自然科学の成立にあつた必要條件は、感性に対する信頼である。五感乃至は肉体の機能への信頼の哲学が、先づ絶対に不可欠の先行條件となる。この点こそが、プラトール哲学の理性尊重、肉体（感性・感覺）無視の哲学から、中世流スコラ哲学の奴婢の哲学からも一線を画する第三の哲学ともいうべき新しい哲学が先づ樹立され、先行してこそ初めて近世の科学、自然科学は芽生えもし順調に發展も可能となる。第三の哲学は人間自体への再評価ともいへる。前時代の哲学において、その機能は誤謬・悪の根源とみなされ無惨にも抹殺されてきた。この時点に至つて、漸く見直され改めて評価され、肉体（感性）に対し、自然のままの、正しい位置付けがなされた訳である。

### 第三の哲学（自然科学）

第三の哲学、自然科学の勃興・成立するに至つた時代には、第一・第二の学問は、最早、不要となつたのであらうか。かかる思想には筆者は組する者ではない。固陋な遍狭、未熟な者には往々にして粗暴にも不要論者はをる。第三の学、自然科学を恰も万能学、絶対学の如く主唱する者は、一種の迷信者の類にすぎない。自然科学は、第一・第二の学にとつて代はるべき学でも万能の学でもない。第三の道を開拓し、第三の業績を果実とした新しい学にすぎない。人間の場合、手は手で、手は足の代替とはならない。手・足にはそれぞれの別個の機能が備はつてゐる。

理性は人間にとつて大事な替へがたい一つの機能を果す。第一の学は現在でも存在する意義はある。プラトール哲学

は今日でも修正批判されて生きつづけてゐる。

人類の悉くに対して真理也と説く聖書の絶対性は特に現在の時点では無条件では承認せられない。この点、賢明な当事者は篤くと承知の筈だ。新教（プロテスタント）の出現は、旧教の看板たる普遍性を相対性に塗りかえる手始めな筈であった。今回の戦後、ローマ法王庁は精力的に世界の有力な諸宗教との調整・和合に努めて、旧教とても、普遍的な宗教ではなく、諸宗教中の一つの宗教にすぎない事実を自ら確認してゐる。当然の賢明な処置と云へる。

自然科学という第三の学問が発展すると、宗教は自づと消滅する、と信じて、過去の一時期には半可通者の中には大声で叫び、少数者を除くと、自然科学の威力の前にやがて宗教は影を潜めると公言する人も多かつた。しかし夢の月世界に人間は第一步を踏みしめた今日と虽ども、宗教の一般的退潮はみられない。自然科学は聖書宗教（キリスト教）から、展開した学ではない。結果からみると、反キリスト教事態を惹起しはしたものの、自然科学は、前時代のキリスト教とは全く異質の哲学を基盤として成立し発展した学である。両者は全く、発生の基盤を異にして、成立した哲学であるから、異なつた機能をそれぞれは有してゐる。よつて古いから、過去・旧套に属するからとて宗教を弊履視することは謬りである。神道流に申すなら、自然科学と宗教とは、機能を異にする。『持ち分け』（学の性格が違うから、学の応用面も違う。一を捨て、他を採る二者択一ではなく、多くのものに、それぞれが持つ固有の機能を認めて、それを生かす哲学）を異にする以上、宗教も自然科学も、それぞれ果す役割の差を認めて、己が領分内で、自己に特有な機能を充分に發揮すべき、であるとみる。

西欧史上、ギリシャ時代からの第一・第二・第三の学問は、何れも同一線上を辿つて、漸次に展開してきたものではない。第一から第二が生れ、第三は第二を経て成立した学ではない。もし左様であるならば、第一・第二は第三の学（自然科学）の成立のための準備段階の学にすぎず、最終の第三の学が出現し業績を示してゐる現在では、せいぜ

い骨董品・美術品程度の価値とみられても止むを得ない。処でこれらの諸学はそれぞれ発生基盤、哲学を異にして成立し且つ通用の領域を異にする学問であるから、何れを採り何れを棄てる、或は何れが必要であり何れが無用のものと軽率に判別することは慎みたい。何れの学問とて、独自の価値はそれぞれ有してゐる。

本項では、第三の学、自然科学の成立の根底には、学問史上、従前は全く無視せられてきた感性の位置付けということがあり、その結果として登場した自然科学的真理探求の学であることが了解せられればよい。

#### 人間観の一つ——自然科学発展の鍵

十四世紀から十六世紀までの時代はルネサンスといはれる。十三世紀ごろよりイタリア半島の全般に亘つて、徐々に栄えた商工業者の造る自由都市の発達と相伴つて、市民の間に封建領主や教会を中心とする従前の文化とは異なつた文化が、次第に芽生え育つ。代表としてフィレンツェ市が算へられる。十五世紀の初期に既に七十二の銀行があつたという。代表は大富豪コジモ・デ・メディチである。金貸し業で、築く財に後めたさを覚えて彼は、教皇の薦めで、聖マルコ修道院を建て寄進。更にコジモは、一四三九年ギリシャ人主体の司教団全員を、全滞在費を負担してフィレンツェに招き公会議を開く。これを機会として、当時のギリシャ、ローマの古典研究に一段の拍車がかかる。古典への接触を契機として、新しい人間像が浮び上り、人間主義が一段と昂揚される。第三の時代の開幕に拍車がかかるのである。

中世のキリスト像は苦痛の象徴である。処で、ルネサンスのそれは筋骨逞しい青年像として描かれる。ルネサンス時代の空気を具像化したとみて宜しい。且つ諸手を高く掲げた姿からは、生きる歓びそのものを謳ひ上げたときの人々の心中がよみとれる（前掲書『ザ・クリスチャンズ』一五九頁）。

苦痛に満ち、打ち拉がれた中世のイエス像は、ここに一変して筋骨たくましい青年像に見事に変貌する。両手を高

く揚げ上げた容姿は、まさに希望に満ち溢れ生きる飲みに陶醉した心の具象化とみられまいか。ルネサンス期の人人の精神の躍動、人間譚歌の投影としてイエスの姿相が相貌を新にして出現した。

そして、この人間、まさに自然の傑作……：つりあいの美しさ、動きの敏活さ、天使のごとき直観、あつぱれ神、

さながら（第二幕第二場、福田恒存訳）

ハムレットは、人間を「あつぱれ神、さながら」と賞讃し評価する。現世の欲望、肉体官能は、悉く罪とみられ却下されつづけてきた前時代までの罪悪感から解放され、自由になったルネサンス人の心情の内面に座を得て甦った。生の飲びである。

人間が生きること飲びを覚える、この現世志向は、前時代のキリスト教時代、プラトール時代のそれとは全く逆である。プラトールは生存中には真理はえられないと説く。キリスト教では来世主義が説かれる。生きてゐることは絶望の極とみる。キリストの像がこよなく象徴的に語つてゐる。この像がルネサンス期には一変する。生気に溢れ筋骨隆隆とした青年像として甦る。肉体の逞しさは、生へのこよなき思慕・渴望を示す。否、誇り、満足さへも示す。科学は生活の豊かさを保証する。科学の生誕はこの時代に將に吻合する。但、科学の限界・陷阱を見逃してはならない。

### むすび

始めがあれば終りが来る、という。近代はどうか。近代は、未だ継続中なのか、終わったのか。近代の終焉が叫ばれてからかなりの時間は経つてゐる。現時は果してどういふ時代であらうか。

近代への反省は西歐で芽生えたことは当然である。西歐の時代区分は、古代・中世・近代乃至は現代を加えて四区分される。古代はギリシャ時代で、思想史上からは、西歐文化の起源はギリシャ・ローマ時代に求められてゐる。近



代は、ルネサンス文芸復興を契機とするも、その範をギリシャ・ローマ時代に求める。古代・中世・近代を思想史上位置付けると、前述の如く、学問の核を真理とみる点は共通するも、その求め方乃至は拠所となると、理性であり、聖書であり、感覚（肉体）であつて、各時代の特徴は厳然として峻別される。では第四の時代の現代の特色は何か。近代の終焉が叫ばれ、脱近代が可能であるとすると、現代を成立せしめる哲学とは何か。

現代を近代から区別し、現代を現代として成立せしめる哲学は、近代的人間観への反省・克服に求められる。一言で申すと、近代の理性絶対優位の人間観の修正の点に第四の哲学の成立の起因が存すると、卑見する。

科学的合理主義とは、理性的合理主義でもある。理性至上主義の面もみられる。従つて非合理主義・非理性主義は反科学主義として拒否され、反真理として軽蔑される。中世否定はキリスト教否定を結果するが、反動として宗教一般への否定、精神・人間の心情一般の否定にまで及んだことは知・情・意を兼備している人間にとって不幸なことであつた。理性的合理主義者は、人間を知・情・意具備の全人間として理解することを拒否し、知的面でのみ人間を評価する偏向に堕した点に気付くには時間を必要とした。近世人間観は、前の時代同様の反面のそれだつた。

科学主義とは客観性をのみ重視し、主観性を排する。さりとて、主観を人間性から全く排除することは、抑々可能であらうか。近代に到つて、とり戻した人間とは理性万能者としての乾からびた理性人間ではなかつた筈である。血も涙もある生き生きとした人間であつた筈だ。知・情・意の人間が理性至上主義者へと偏向してゆく契機は、自然科学が客観性・冷静さ（理性の冷さ）を研究上、常に要求する（当然のこと）に伴つて、何時しか、人間自体に客観性をのみ求めるようになった、と思はれる。かくて客観的に冷静に第三者として傍観者としての立居振舞う人間を科学的・理性的に優れてをる、と誤解して評価を下すやうになる。

対人不信感の第一歩ここに初まる。特に教養ある人々は、又社会的上層、富裕者にとつては、内心はとも角として

西欧キリスト教社会では教会への参拝は欠くことの許されぬ行事であつてみると、原罪意識は幼児時代から教えこまれるし、西欧では、学校の教育も亦、原罪観が前提となつて授業が行はれる。一方、下層な家庭では、子供への月曜参拝にも登校にも、さして干渉しない。結果的には、世間という問題児(プロブレム・チャイルド)は上層家庭に多く、下層者の子弟に少いとの一見まことに妙な逆な現象が生れる。何故か。生れ付き罪人である、悪人である、との前提に立つての説教なり教育からは、問題児が多い事実注目すると、教育の前提に謬りがあるのではないか。かかる神学はパウロ神学に基因する。元来の聖書の教へからパウロ説は逸脱し更に曲解してゐる。人は神の子であつて、罪人ではない。以上、A・S・ニールは「問題の子供」の一部で語る。

ニールは敬虔なクリスチャンで教育者でもある。ただパウロ神学流の正統神学には組みしなかつた。この原罪論は、人間相互不信感を生む一つの原因とならうか、と思う。

人間の自然の状況は、既にのべた通り、家庭人としての誕生が語つてゐる如く、相互信頼感による他者との関係的存在者としてである。そこでこの関係を持続せしめることが、人間として生きる上で自然である筈だ。自然であることを破壊するのは作為であつて、そこに働くものは、自然を悪とみなす哲学であらう。

ここで申す自然とは安易な単純なアリノママを指している訳ではない。人間の基本的なアリカタを指す。生善説も生悪説も、共にイデオロギーにすぎない。観念論であつて、広くみると一種の憶説であり参考意見にすぎず、人間の本質を普遍的に明確に説き明した真理ではない。この点に注意すべきか、と思う。

学説とは常に相對説である。自然科学の説く理論ともども、時間空間を超えて普遍に妥当するものではない。一つ的前提に則して広く納得せられるに止まる。でなければ自然科学には進歩がない。前提が、諸学の努力の積み重ねで、より豊富に、より正確に、或は新たな発見によつて補正・修正され、新に提唱されるや、従来理論は却けられたり、

新たに理論が確立される。茲に学問の展開なり発展があらう。

学説は学説で一つの学説に徒に無条件に拘泥することは避けるべきである。ドグマとて同様である。主張する立場の側でも、謙虚に開陳し、批判を喜んでうける心構えが必要である。

孤独な生活は、固より不自然な生活である。素直に、一切のドグマ・イデオロギーを振り捨て、胸を開いて、相互に相対してこそ打開の道は拓かれる。アメリカでヌーティスト運動が起ったことも了解される。一つの孤独生活打破の道であると推量されるが、どうであらう。

— 昭和59・12・20 —